学校経営コース　広報誌

嬉望

令和６年度　第１号

兵庫教育大学教職大学院
学校経営コース
編集部（田中、堀井）

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。

兵教大マスコット
キャラクター

学校経営コース　教員紹介・専門領域

當山　清実　教授
教師教育、教育経営
大野　裕己　教授
学校経営学、学校改善
川上　泰彦　教授
教育政策、教育行政学
神内　聡　教授
教育法、教育制度
安藤　福光　准教授
カリキュラムマネジメント
三浦　智子　准教授
教育経営学、教育行政学
淺野　良一　客員教授
組織マネジメント、職能開発
岸田　隆博　客員教授
課題研究
中井　啓之　客員教授
課題研究
長井　勘治　客員教授
課題研究

コース長挨拶

学校経営コース長
當山　清実

今年度は、フルタイム修学の昼間クラス十名、仕事と修学の両立を目指すフレックスクラス十二名、合計二十二名の入学生を迎えました。二年生を含む在学生の総計は、四十五名となりました。

派遣元・勤務先は、関西を中心に、二十都道府県の広域から、全校種にわたる個性豊かな学生が在籍しています。

職層も幅広く、現職の校長・教頭等の学校管理職や教諭等の教育職のみならず、学校事務職、教育行政職、私学の教職員を含む、多士済々の集団です。

学生の多様性を活かすとともに、これまでの蓄積を踏まえながら、より充実した教育活動を展開できるよう、教職員一同努めてまいります。

激変の時代の学校づくりと、その支援を先導し得る職能開発に向けたカリキュラム開発にも取り組みます。

本コースの更なる発展には、派遣元教育委員会、勤務機関、修了生をはじめとする関係各位のご協力が不可欠です。今後益々のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

着任教員自己紹介

大野　裕己

福岡県北九州市出身、学校経営・学校改善が専門領域です。二〇〇八～一六年度に本コース専任教員として在職し、八年ぶりに戻ってまいりました。当時在学された修了生の方々より、現在の学校づくりに関わる機会を早速いただいていること（他者を値踏みせず包摂できる本コースの本質）に感謝しつつ、新しい職務に向き合っています。この間の学会／研究・教育行政等でのささやかな経験から、皆様の学びにお役立ちできるよう努力したいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

※SNS 上の研究室ページで取組の一部を紹介しています。ご高覧ください。

※凡例
昼…昼間コース
フ…フレックスコース
一…一年
二…二年

キャンパスライフ

「昼間クラス紹介」

兵庫県立西宮今津高等学校
田中　一嘉（昼・一）

このたび、本大学院で二年間学ぶ機会をいただきました。

四十五期昼間コース生の校種内訳は、小学校四名、中学校一名、高等学校三名、特別支援学校二名です。地域内訳は、兵庫県五名、岡山県一名、鳥取県二名、鹿児島県一名（兵教大附属中所属）、北海道一名（兵教大附属小所属）です。

入学動機は様々ですが、皆、学校経営に関心を持ち、学校のリーダーとしての心構えとビジョン、知識を身につけるべく、学びを進めております。

本大学院でのオンライン授業の組み合わせとデジタル式連絡方法に四苦八苦しておりますが、これも新しい学びの形であり、その利点を活かした学生生活を送っております。そして、やはり対面での指導とコミュニケーションの大切さを感じております。

在学生、教員、卒業生、外部の専門家、すべての皆様との出会いと学びを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いします。

「現場を離れて見えたこと」

鳥取県日南町立日南小学校
桑原　知也（昼・一）

今年度から学校現場を離れ、教職大学院に入学するという大きな決断をしました。日々の授業や児童との触れ合いが中心だった学校現場と比べると、大きく異なります。

教育現場は常に動きがあり、児童の成長を目の当たりにすることで、教育者としてのやりがいや喜びを感じることができました。しかし同時に、その忙しさの中で、自分自身の教育方法や理論について深く考える余裕がありません。

教職大学院に入学してからは、理論や研究に重点を置いた生活が始まりました。日々の生活は以前ほどの緊張感はないものの、自分自身と向き合い、教育に対する理解を深める時間が増えました。研究を通じて、これまでの教育現場での経験を振り返り、新たな視点を得ることで、自分の教育者としての姿を再認識することができています。

入学当初は現場を離れることへの不安がありました。自分が直接子どもたちに何かを教えることができなくなることに対する焦りや、現場から離れることで教育者としての感覚が鈍るのではないかという恐れがありました。しかし、大学院での学びを通じて、教育者としての自分を客観的に見つめ直すことができるようになり、新たな成長の機会を感じています。再び現場に戻ったとき、今学んでいる理論や知識を、より実践的に活かしていきたいと思っています。

「2年後を見越して」

鳥取県琴浦町立浦安小学校
真山　健作（昼・一）

十八年間の教諭生活の中でも、算数科や外国語教育を中心に、実践研究や授業研究を行ってきました。しかし、大学院での学びでは、子どもたちや教室という場を離れ、徹底的に先行研究、先進事例を分析し、仮説を立てながら現場に戻った時にどのように活用できるのかを長時間考え、検証していくというものです。クリティカルシンキングをフルに活用し、現在の教育を見直すことはとても有意義な時間であり、教授のみなさんや他の学生仲間との出会いも一生の宝物となりそうです。

大学生以来の一人暮らしの生活も楽しみながらやっています。兵庫県は魅力的な場所が多く、休みの日に探検するのも楽しいです。2年後、しっかり自分なりの武器を持って修了できるよう、今後の学生生活もがんばります。

「新たな視点で教育を見つめて」

鳥取県立八頭高等学校
木下　和成（昼・二）

大学院での学びは、私にとってこれまで経験したことのない新たな挑戦です。大学院では学校現場での実践が、理論的に裏付けられる機会が得られます。学んだ理論を通じて、これまでの実践の意義が深く認識できたり新たな視点で教育を見つめたりする機会を得ています。一方で、授業や課題に追われる日々は決して楽ではありませんが、学修の苦しみを楽しんでいる自分がいます。その過程で新たな発見や自己成長を実感しています。

兵庫での単身赴任生活は、二十数年前の大学生以来で、新鮮な気持ちです。環境の変化に順応するのは容易ではありませんが、学修をしていく環境としては最適です。さらに、この大学院での生活では、同じ志を持つ仲間たちとの出会いも大きな財産です。彼らと共に授業を受けたり、院生室での積極的なディスカッションや情報交換は、私にとって大きな刺激であり、教員としての視野を広げる貴重な機会となっています。この経験を通じて、教育現場に戻った際には、より良い教育の提供を目指し、これまで以上に力を注いでいきたいと思います。

「『幅広い知識』を求めて」

雲雀丘学園中学校・高等学校
道北　秀寿（フ・一）

最近の学校では様々な対応を求められます。新型コロナにアレルギー、熱中症に防災といった安全に関することはもちろん、いじめに部活動、教員採用とこれまでの考え方や手法に大きな変更を要することまで様々です。このような現場を前に、新たに学ばずに教員を続けていくことは難しいと感じています。

私は幸運にもフレックスコースで学ぶ機会を得ました。日々の業務の合間を見つけ、計画を立て学習を進めることは予想より苦戦しています。しかし、普段感じる疑問を客観的に見直すことができたり、それらを「言語化」してまとめてみたりすると新たな発見があります。学び始めてまだ半年ですが、より自信をもって日々の業務に当たることができていると感じます。

最近、学校経営では教育に関する詳しい知識だけでなく、社会一般の「幅広い知識」が求められると強く感じています。知識の幅を大きく広げるため、これからも大学院での学びを大切にしたいと考えています。

「新たな役割と教職大学院での学び」

兵庫県立
上野ケ原特別支援学校
吉岡　知子（フ・一）

「兵教大に教職大学院ができる」という情報を得て十六年目の今、実際に私が学んでいる。この現実に嬉しさと不思議なご縁を感じています。

今年度、私は職場で新たな校務を担い現場の仕事と大学

院で学ぶことの両方を得る一年となりました。大学院の学びは、仕事において迷いや疑問にぶつかった時に解決のヒントになることが盛り込まれています。フレックスクラスで学べる利点は、自分のタイミングで授業に集中できることです。通勤途上でラジオ代わりに講義を聞くこともでき、繰り返し講義を受けることができます。また、オンラインの授業では、グループで意見交流できる場もあり、様々な考え方に触れられることが私にとって良い刺激となっています。時間を有効に使い、学びと実践とを絡ませて様々なことを試しながら歩みたいと思います。

「フレックスコースでの学び」

（兵庫県在住　フ・一）

学校経営コースの授業は、組織運営、教育課程の変遷、法規など多岐にわたるテーマが扱われ、これまでの勤務経験をその学びに反映させることで、より深い理解と実践力を身につけることができます。学校経営コースでは、公立、私立、校種、職種、様々な立場から学校に関わっている学生が、多種多様な興味関心を持って学んでいます。その仲間との交流や情報交換は、これまであまり意識しなかった分野にまで視野を広げるきっかけとなり、大きな励みともなっています。オンデマンドの授業は、始業前に視聴し、終業後にレポート提出するなど、自分の仕事に合わせて、毎日のルーティンを作り、学びを進めています。オンライン同期型の授業は、可能な限り参加するようにし、参加できない場合は、振替の動画を視聴します。働きながら学ぶことは、決して容易ではありませんが、時間管理を工夫したり、優先順位をつけたりすることで、充実した日々を送っています。

「フレックスクラスでの仕事と学びの両立」

リリー文化学園副学園長

園部　高生（フ・二）

コロナ禍の中で大学院に入学し、一年半が過ぎようとしています。フレックスクラスでの学びは大学院入学当初、仕事との両立が不安でしたが、学校経営コースの先生方、先輩方のご指導ご助言のお陰で単位修得が出来ています。また、自身の研究のペースや授業課題の提出物などは同期の皆さまの励ましがあり、高いモチベーションを維持しております。今年度は仕事上で大きなプロジェクトを任されていることから、授業に参加が出来ないこともあり不安な気持ちになります。しかし、フレックスクラスの皆さまも同じように仕事を抱え多忙な中で時間を確保し、研究活動をする姿に勇気をいただいております。私は現在、学校法人の経営に関わっており、学校経営コースの学びが活かされる環境に身を置いております。再度、大学院進学を決意した時の気持ちを思い出しながら、残り半年間の研究活動を同期、後輩の皆さまと切磋琢磨しながら大学院生活を謳歌したいと思います。

「環境づくりとサードプレイス」

京都府宇治市立

西大久保小学校

西　祐子（フ・二）

よくよく考えてみると高校の時も浪人時代も家で勉強することが苦手でした。テスト前もとりあえず机の整理から始まり、すぐにテレビに誘惑されぐずぐずしてしまう。そんな自分の性分をこの年齢になって改めて自覚しないといけないことになりました。フレックスの学びでもそうです。家や放課後の校長室で取り組もうとしても、どうしても家や学校のことが気になり、すぐに他のことに手を出してしまいます。でも、とりあえずは家の中にも机を設置し、ＰＣ置き場が誕生。その居場所も活用しながら、週何回かの仕事終わり一時間ほどのカフェ、休みの日の図書館が私のサードプレイスになりました。どこでも取り組めるのがフレックスのよさ。そんな環境でこの一年半学びを進めています。ただ、高校生の当時と違うのは学ぶことが楽しいということです。

今、学び直す機会を許してくれている環境に、そして共に学びを進められている仲間の存在に感謝の毎日です。

「仕事と院生の両立のためのフレックスクラス」

神奈川県立田奈高等学校

貝川　巧行（フ・二）

様々な困難を抱えている生徒たちと常に気を張って接していると、時間のことを考えることができません。問題が起こると夜遅くなることもあります。平日に学習することが難しい時は土日を活用して行ってきました。フレックスクラスだから授業で学んだことを学校で試すこともできました。生徒対応で悩んだときに授業後に大学の先生に質問をしてヒントをいただき、その内容を学校で話し合ったこともあります。個人の研究も実践を通して深めることができ、わからなくなったときには大学の先生方に質問をして、いただいたヒントから再スタートをしていました。二年目に入り、体調を崩し入院・手術をすることになり、学習と研究に大きく遅れました。とても不安な状態ではありますが、遅れを取り戻すために、平日の夜と土日に学び続けることで、学ぶことの楽しさにようやっと気が付いたような

気がします（とてもきついと感じてもいますが）。先生方や院生の皆さんと同じ教室で学んでみたいという気持ちもわいてきますが、フレックスクラスだからこそ遠い場所からでも皆さんと学べることに幸せを感じています。

「フレックスならではの学び」

埼玉県さいたま市立
ひまわり特別支援学校
米沢谷　将（フ・二）

「仕事の後に授業の動画を視聴しよう。」「レポートを書く時間がなかったから週末にやろう。」。働きながら大学院で学ぶ生活は二年目を迎えました。仕事、家庭生活、大学院の学び…、うまく両立させたいと思うもののなかなか描いた理想どおりにはいきません。「この履修ペースで大丈夫かな」と心配になることも多々あります。しかし、フレックスクラスの柔軟な学びの仕組み、大学の先生方の現職教員の状況に応じた懇切丁寧なご指導、学校経営コースの学生同士のつながり、そして上司や家族の理解のおかげで少しずつ歩みを進めています。現職のまま学ぶことは決して楽ではありませんが、そのよさを確かに実感しています。

「こうしたらもっとよくなるかもしれない。」大学院での学びを通して、日々の教育実践のアイデアを創造し、できるタイミングで、できることから積極的に取り組んでいます。これが功を奏したときの面白さも感じています。引き続き、自分のペースで学び続け、教育実践の充実につなげていきたいと考えています。

大学院での学び
～前期授業を終えて～

「知らないことを知る毎日」

兵庫県立兵庫工業高等学校
上田　敬司（昼・一）

現場から離れて、学生として学ぶ中で自分自身が教育の限定された範囲で活動していたことを身に染みた毎日です。

當山先生の「教員の社会的役割と自己啓発」では、日本の教員の役割が諸外国と比べると多くて多忙化の原因にもなっていることや、教育に分担される予算が全体ではどのくらいでどうのように支出されているのかなど今まではあまり考えもしなかったことを知ることができ、今までよりも広い視野で物事を考えるようになりました。

大学の授業では学校経営コースの学生だけではなく、他コースの学生はもちろん学部生も受講しているため、幅広い校種や教科の先生方、兵庫県以外に在籍の方とも意見や情報交換を活発に行うことで、各都道府県での教育活動の違いを知り、より兵庫県の教育のことに関心を持つようになりました。今後も知らないことを恥ずかしがらず、知る活動をしていきたいです。

「実践に生きる学び」

静岡県長泉町立長泉中学校
長田　有樹（昼・二）

「学校・地域協働の理論とデザイン」では、学校と地域が連携し協働する重要性やその実践について深く学びました。特に、「開かれた学校経営」や地域資源の活用によるカリキュラムの特色化など、実践的視点からの理解が得られた点が大きいです。事例研究を通じて、現場での課題解決にどう応用するかを学びました。

「学校・教育委員会のEBPMと評価」では、教育施策の立案と評価について、政策体系の変化とその影響を理解することが目的でした。政策評価や費用対効果の分析を通じて、教育行政の改善に向けたプランを立案する方法を学びました。自治体と学校の連携強化が、教育政策の成功に不可欠であることを再確認しました。

これらの講義を通じて、理論と実践を結びつけ、地域社会と教育機関が協力してより良い教育環境を創り出すための具体的な方法を学ぶことができました。今後は、学んだことを現場でどう活かすかを考えながら、より効果的な教育施策の推進に貢献していきたいと思います。

「法の意義を
知ることの大切さ」

京都府城陽市立東城陽中学校
室田　美佳（フ・一）

前期の受講科目の中で、神内先生の「教育法規の理論と実践演習」が、特にタイムリーに参考になりました。〝第五回いじめ防止対策推進法〟の講義の中に出てきた〝少年法〟について、法の意義と目的を押さえることができました。いじめ問題ではなく、昨年度から継続して起こっていた別の種類の生徒指導事象について同様に捉えることができ、警察に対応を求めると少年法が適用される、少年法は加害者の更生を目的としている、この二点が校内での対応の方針決定に非常に参考になりました。加害者に罰を与えるという発想ではなく、更生を目指すという視点で教員の意思統一を図ることができました。

坂本先生（第十四回ゲストスピーカー）が学校教育の法務化現象と学校現場への法の越境について触れられ、学校毎の判断が少なくなっている現状、学校も指導の対応について警察へ相談をかけることがある現状を踏まえ、教育関係の法の意義を知ることの大切さが身に染みる科目でした。

「学びを現場につないで」

新潟県新潟市立
白根第一中学校
松野　千恵美（フ・二）

昨年度で教育課程・教科・生徒指導・学校経営等の所定の共通基礎科目を終わらせ、2年目前期は、専門科目「学校・教育委員会のEBPMと評価」「学校・地域協働の理論とデザイン」に集中して取り組みました。

行財政や地域協働は事務長の業務と密接な関わりがあり、全体の理論から細かな施策・結果に至るまで、提示された資料や課題を読み解きつつ自らも資料を検索して考えを整理していきます。経験や勘ではなく現状や具体的な数値を根拠にした立案と評価を現任校に取り入れる効果や手立てについては、管理職や職員とも話をしました。それは「地域とともにある学校づくり」のビジョンの共有や熟議の企画等にもつながり、二つの授業が相互に深められる時間でした。

特に、対面やオンラインで、互いに持ち寄ったレポートによる協議は、独学では得られない経験とアイデアを得ることができ、新たな実践と知見への意欲となりました。

研究

「研究について（一人一人の職員と向き合って）」

兵庫県立姫路特別支援学校
元持　典子（昼・一）

夏休み中にこの原稿を執筆しているのですが、今は現任校描写の中で、職員アンケートをとったり、インタビューを実施している最中です。特に夏休み中なので、五十人程度の職員にインタビュー調査を実施しています。これがなかなか興味深く、また新しい気づきの連続なのです。一緒に働いていただけでは見えてこない、一人一人のお考えを聞くことで、自分の考えの浅さに反省することもしきりです。大学院の授業もそうなのですが、この年齢になっても知らないこと、気づいていないこと自分の無知を知る毎日です。

私の研究は、特別支援学校における有効なチームティーチングが大まかなテーマなのですが、チームティーチングの達人は、生き方の達人であります。さらに言うと、その方たちは決して目立つ職員でもないことがあります。さりげない心遣いや気配りが、人間関係をいかに保っているのか改めて気づかされる研究になっています。

「大学院での研究　～苦労と充実～」

兵庫県立
上野ケ原特別支援学校
眞下　英彦（昼・二）

私の現任校は三つの部署がある特別支援学校です。私は訪問教育の部署に長くいたこともあり、中心となる本校の事情を当初十分に把握できていませんでした。そのため研究の起点となる学校の課題を掴むことが困難で、校長からの聞き取りや学校評価を深く読み込むことにより、少しずつ進めていきました。

先進校訪問での訪問先決定でも苦労しました。前期の講義が終了し、学校の課題を詰め切れていない時期に懸命に検討しました。その後、新たな情報を得るために慌てて訪問先を選定した経験もあり、早めにそして計画的に進めることの必要性を痛感しました。

現在、私は防災体制の強化や防災教育の充実に向けた学校改善のあり方について、研究を進めています。派遣前に委嘱を受けていた、兵庫県の震災・学校支援チームEASTの一員としての知見も活かしており、講義での「関心がある分野を研究に活かすことも大切」という説明を理解できました。今後研究を進め、兵庫県の特別支援教育の向上に少しでも資することができればと考えています。

「理論と実践の往還」

静岡県磐田市立磐田北小学校
國松　保（フ・一）

「理論と実践の往還」では、「理論を実践化する力」と「実践を理論化する力」が必要だと考えます。大学院の講義での様々な理論の学び直しから、学びを教科教育や学校課題解決のためにどのように現場で実践化するか、また今まで実践論文としてまとめてきたものを、様々な手法で分析し直し、新たな価値をどのように理論化するか、この二点が現在の私の課題となっています。

令和四年「令和の日本型学校教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」（中教審答申）で「新たな教師の学びの姿」が示されました。今後は「個別最適」「協働的」な学びの一体化による「主体的・対話的で深い学び」を通して、専門職としての学びの充実が求められています。

兵庫教育大学大学院のフレックスコースは、まさにその学びを実現できるところです。この環境に感謝し、本学での学びを多くの人たちに還元していけたらと思います。

編集後記

本誌は、学校経営コースに関心のある方に対して、科目内容や大学院での学びの様子をお伝えするものです。

プライバシーへの配慮のため、画像などの使用に制限をかけてありますが、現役院生の学びや仕事との両立の様子を、前期・後期に分けてお伝えします。